

学ぶに如かず

2022/04/18



本を読みましょう

孔子はいいました — 「吾れかつて終日食らわず、終夜寝(い)ねずして、思いぬ。益なし。学ぶに如(し)かざる也」

中国文学者の吉川幸次郎先生は解説して言います — 「終日終夜の思索も、その効果は、学(がく)、すなわち読書に及ばない」。

「学ぶ」とは本を読むことなのです。学校へ行ったり、塾で個人教授を受けたり、テレ学習するよりも、「本を読みなさい」と孔子はいうのです。「でも、本を読むだけが学問ではないでしょう」という正直な弟子には、「是れ故(ゆえ)に夫(そ)の佞者(ねいしゃ:悪い奴)を悪(にく)む」といって嫌いました。それほど、本を読むことは大事なのです。

むろん、この言葉は、『論語』と言う本に書いてあるのですから、「まず、私の本(『論語』)を読み」と孔子がいうのはもっともです。(笑い) でも、紀元前 552 年頃に産まれた聖人の教えを請うことが出来るのも本のおかげです。正直、素直に教訓を聞くことは大事です。

そういえば、私のお気に入りの室町時代の教訓集『十訓抄』(じっしんしょう)にも、次のような一文があります。これも、「文(=本)の教え」の大切さを具体的に説くものです。少々、些事(さじ:些細なこと)に過ぎませんが。

人の寄り合ひて、うちささやきなどせむ所へは、はじめより交じりをらざらむには、寄るべからず。おのずからあしく行き合ひたりとも、さらぬやうにて立ちのくべし。これ文の教えなり。

人がより集まって、何かよくない事をささやき合っているようなところへは、近づかないのがよいと言い、偶然行き合ったらそ知らぬようすで退き避けるのがよいと書は教えている。

終日、なにを思ったのか？

でも、元々の話に戻ると、「終日、思えども益なし」と言っていますが、一体、「何」を、終日、考えていたのでしょうか？ きっと、終日、考えていても、分からない「難問」に違いありません。それは、いままでだれも解決出来なかった問題であり、答のない「問い」であることでしょう。「宇宙の始まりはどうだったのか？」「人間とはなにか？」「人生とはなにか？」「生きるとはなにか？」「死ぬとはどういうことか？」などなどです。この思考には、「絶望」しかありません。本にも書いてありません。

では、どうするか？ それは、良き師や良きパートナー(先輩や兄弟や同僚や後輩など)を見つけて「問答」するより他はありません。

有縁の善智識

『歎異抄』は巻頭で、著者の唯円が、パートナーの大事さを次のようにいっています —

今は亡き親鸞聖人がお聞かせくださったお言葉のうち、耳の底に残って忘れられないものを、少しばかり(『歎異抄』として)書き記すことにします。これはただ、同じ念仏の道を歩まれる人々の疑問を取り除きたいからです。わたしなりにつたない思いをめぐらして、親鸞聖人がおいでになったころと今とをくらべてみますと、このごろは、聖人から直接お聞きした真実の信心とは異なることが説かれていて、嘆かわしいことです。これでは、後のものが教えを受け継いでいくにあたり、さまざまな疑いや迷いがおきるのではないかと思われまます。

幸いにも縁あって、まことの教えを示してくださる方(有縁の善智識)に出会うことがなかったなら、どうしてこの易行(いぎょう:簡単)の道に入ること

ができるでしょうか。決して自分勝手な考えにとらわれて、本願他力の教えのかなめを思い誤ることがあってはなりません。

『歎異抄』の「歎異」とは、著者の唯円が、「私が直接に聞いた親鸞の教えと異なることがはびこっているのを嘆く」という意味です。唯円は、師の教えを間違っ

て解釈している人たちを怒るのではなくて、嘆いているのです。また、「本願他力」もまた、「人任せでいい」ということではありません。これは、自力で、とことん終日考えても答が見つからなかった結果、「絶望した人」が相手なのです。「絶望」まで行かないと「学ぶに如かずとはならない」と孔子は

問答をする

20世紀の科学で最大の「問題」は、「量子」でした。物質を作っている「原子」や「電子」よりももっと小さいのが「量子」です。微視的な世界にある量子の存在は、実験では確かめられないのです。実験で確かめられないものは、「ある」のではなく存在が「ない」と同じです。なぜ、実験で確かめられないかと言

えば、粒子の速度を計ろうとするとその粒子があまりにも小さいので位置を正確に測れなくなり、位置を測ろうとすると速度が測れなくなるからです。それでも、マックス・プランクは、「量子は存在する」と主張します。その量子の謎を鍵を解く「スピン」について、物理学者たちは、量子理論の専門家ニールス・ボーアの意見を聞こうとやっきです。お祝いの行事にライデンへ向かうボーアの乗った列車がハンブルクの駅に着くとパウリが待ち構えていて意見を聞きました。また、列車がライデン駅に着くとアインシュタインとエーレンフェストが待っていました。帰りの列車でも、ゲッティンゲンではハイゼンベルクとパスカル・ヨルダンが待っていました。また、別の日、ボーアが、記念行事のためにベルリンに向かうと、駅にはまたパウリがま

私のホームページ開講

っていました。パウリ自身も、生涯を通じて何千通という手紙を書いて、自分の意見を仲間に知らせました。こうして、「難問」を解くために仲間同士の意見の交換会がなされたのです。これも、「本願他力」です。しかし、それでも、いまだもって、量子の姿を実験で確認することはできないのです。私のホームページも、思わぬ方のお誘いがあった、この4月から立ち上がることになりました。とても、嬉しいです。前にも、お話ししましたが、長年つづけてきた名古屋オペラサロンも、コロナ禍による会場難で3月に解散しました。少々、悄気(しよげ)で、「絶望」している私を励ますために、お仲間からは、「ホームページを作ろう」というお話があり、NHK文化センターの名古屋教室からは、「もう一講座、開設しては」というお話がありました。嬉しいです。それで、早速、ホームページを作ってください、NHK文化センターでは、いままでの木曜講座に加えて、土曜講座も新設していただきました。この両方が、同時に出来たので、ホームページとNHKの講座を併せて、そして、あまりお会い出来なくなった、古くからの名古屋オペラサロンの方々にも読んでいただきたく、「オペラの話」を書くことにしました。

このコロナ禍で、終日家にいることが多く、時間はいつもより沢山あります。どんどん書いている内にもう、30講を越えました。

引用文が本文

読み返してみると、反省すべきことも、少なくありません。まず、引用文が半分以上も占める項目が、多々あることです。しかも、その引用文たるや、長編小説の『ドン・キホーテ』や『戦争と平和』からなのであって、作者がこれ以上短く出来ずに困った結果の長文ですから、勿体なくて、短く出来ないで、所詮(しょせん)、全文が長くなってしまったものです。「長いのであとで読みます」というメールもあり、みなさまにはご迷惑をおかけしています。とはいえ、引用文は、どれもまとまりのいい名文で — と、いっても、それは、分かり易い、気品のある邦訳のことなのですが — ぜひ、本文を、たとえばその一部分だとしても、そのままお読みいただきたいと思ったのです。『ドン・キホーテ』も、『戦争と平和』も、いずれも長い長いお話なので、普段、なかなか読む機会もないでしょう。そのご紹介も兼ねて、「学ぶに如かず」のお手伝いをさせていただいたという訳です。ですから、引用文が本文であって、引用文は、本文以上に、よくお読みいただきたいのです — とお願いしておきます。

感謝の言葉

このようにできたホームページですが、おかげさまで、概して、好評です。これも、私のホームページの立ち上げを、最初から完成まで、お一人でお引き受けいただいて、技術的なものはむろん、画面のレイアウトから構成まで、すべてやり遂げ下さった恩人のおかげです。良きプロデューサーに感謝しつつ、『十訓抄』から一文を引用します。

人は善き友に逢はむことをこひねがふべきなり。「麻の中の蓬(よもぎ)はためざるにおのづから直し」といふ譬えあり。蓬は枝ざし直からぬ草なり。されども、麻に生いまじりぬれば、ゆがみて行くべき道のなきままに、心ならずうるわしく生ひのぼるなり。心のあしき人なれども、うるはしくうちある人の中に交はりぬれば、さすがかれこれをはばかりに、おのづから直しくなるなり。これによりて、善き友に逢はむ事を経にも説かれ、文にもすすめたり。顔氏が家訓には、「善い人と一緒にいるのは、芝や蘭の花のある室に入るようなものだ。久しく経つと芝蘭の芳香がうつるように、感化されて自然によい心になるのである。悪い人と一緒にいるのは、魚の干物を売るくさい店にいるようなものである。久しく経つと、そのくさい臭いがうつるように、自然に悪い心になるのである」といへり。

また、ある文には、「人の心は水の入物に随ふが如し。入物(いれもの)細ければすなはち細くなり、入物円ければすなはち円くなる。心は朋友にならふ。何ぞ扱(えら)ばざるべけむや」と書けり。また、九条殿の遺誡(いかい)には、「高声悪狂の人に伴なふ事なかれ」と教へ給へり。かかれれば、はかなくうち語らはむ友なりとも、よくその人を扱ふべし。「薰薷(くんゆ):香草と臭草)酒器を異にすべし」となり。花のもとに春ばかりを契り、月の前に一夜を限る友までも、情あるたぐひは、忘れがたく思ひ出でらるるもの

なり。すべて友を語らふには、隔つる心なきを徳とす。ゆめゆめ心あしからむ人には伴なふべからず。

また、長い引用文になりました。私の周りは、麻と蘭のお仲間ばかりです。幸せです。花屋さんには良いお話ですが、干し魚屋さんには失礼なお話でした。今回は、これでお仕舞い。

都築正道